

小 林 文 男

I

……雪の多い寒い冬のさなかにわたしはロシアを去った。わたしの通り抜けた道は——。

こういう文章で始まるゲルツェンの『ロシアにおける革命思想の発達』をはじめて読んだのは、いつの頃であったろうか。もうずいぶん、昔のような気がする。あれは大学に入った年であるから、かれこれ四半世紀も前のことになるであろうか。

当時、左翼かぶれの学生であった私は、大学の授業などはほとんど出席せず、ただただ革命やマルクス主義に関する文献を、手当りしだいに読みあさっていた。エドガー・スノウの『中国の赤い星』を読んだのも、この時期であったろうか。分りもしないのに、『資本論』にもかじりついた。ロマン・ローランの『ジャン・クリストフ』に戻したこともあった。多喜二や透谷にも、どれだけ影響をうけたか分らない。毛沢東は、私の「専門」になった。

だが、長い時の流れのなかで、それらの内の多くは忘れてしまった。けれども不思議に、このゲルツェンの文章だけは鮮明に頭に残っている。いまでも岩波文庫版のあの本の最初の一頁は、ほとんど暗誦できるほどである。ロシアへのあこがれ、革命への渇望が、私にはあったのかも知れない。

だから、ソビエトへ初めて行った時、突如として わき起ってきたのも、やはりゲルツェンであった。 モスクワへ旅した人はおぼえていると思うのだが、 飛行機がシェレヴチク空港に近づくと、眼下にひろ がる原野のなかにロシアの村々が見えてくる。点在 する農場、寄りそっている小さな家々、共同体であ る。そして、これはゲルツェンの描いたものでもあ った。私はゲルツェンと同じく「雪の多い寒い冬の さなか」を、いくどロシアを去ったことか。青春の ある時期、自分の心に描いた風景が現実のものとな った時、人は何を思うであろう。深く、しかし、哀 愁をともなった静かな感動である。ゲルツェンは、 そういう意味で、私の「青春の証明」である。 II

にもかかわらず、考えてみれば、私はゲルツェンの心象と思想を自分のものにしたわけではない。そういえれば幸せなのであるが、そうではなく、私がゲルツェンを忘れられないのは、上記の書き出しに始まるような、ああいう見事な文章をいつか書きたい、四角ばった学術用語ではなく、こういう文章で学問を描いてみたい、そういう思念がいつも潜在していたからだと思う。ゲルツェンについて、ゴーリキはいっている。「ゲルツェンは――最初のロシアの思想家である。彼以上にはロシアの生活をかくも多面的に、かくも深く観察したものはいなかった」、と。

そして事実、ゲルツェンはロシアに生きたマルクス以前の最大の社会主義者であり、デカプリストたちと前世紀60年代の革命家たち、たとえばチェルヌイシェフスキーやドブロリューボフとを結びつける役割をになった人であった。ロシアにおけるマルクス主義の発展、レーニンの革命はその延長である。そんな人に私などがなれるわけはない。言葉を、文章を学ぶだけが一杯であった。

しかし、こういう言葉に出会ったこと、このことが私の生涯を決定したことも確かであろう。私のその後の学的、かつ人生の遍歴は、ゲルツェンの世界への陶酔と埋没であったからである。

若い友、新入生諸君! 若い時代にある言葉に魅せられるということは、以後の人生の大部分を決定するのである。大学に入ったのだから、たくさんの本を読んでほしい。読書することは、人生に触れること、愛を知ることである。授業に出て専門の知識を得ることはもちろん大切であるが、同時に、授業には直接的にはあらわれない、それぞれの先生の人間性と人生をも学ぶのでなければ、授業に出る必要はない。「専門バカ」という言葉があるが、そういう人を真似するのは、人間としての強く豊かな基盤、専門を受けいれる土壌がなくて専門性は構築できないし、「専門家」たることはできないのである。「専

門バカ」になること自体、実は大変なことなのである。

そして、冒険をしてほしい。知的冒険をとおして、 人間性を高めてほしい。そのためには、言葉に酔い、 言葉の向う側に何があるのか、とつねにイマジネー ションを働かせてほしい。若い君たちには、それが できる。

H

「三無」とか「四無」とか、最近の若者を評して、それてそ無責任な表現がたくさんつくられている。しかし、私は君たちをそんな風には少しも考えない。青年には限りない創造力があり、無限の可能性がある。君ら一人ひとりには、君自身にしかない素晴らしいちからがある。(この一年、一般教養をおしえてそのことがよくわかった。私は文学部でもなければ教育学部でもない、総合科学部の教師になって本当によかったと思っている。)ただ、それを表現する手段を知らない、それをひき出してくれる言葉を知らないだけなのだ。その言葉を発見してほしい。そして、発見することこそが、不幸にして大学の門をくぐれなかった多くの君たちの友人に報いることであり、強いてはそれが文化の発展につながることを自覚してほしい。

最近,「不確実性」なる言葉が流行しており, こ

てには少なからず、未来に対するデスペレートな陰 影がある。だが、「不確実性」な時代であればある ほど、いや「不確実性」なればこそ、かえって確実 なもの、より確かな真実を求めていくのが、人間で はないのか。人間の歴史、いいかえれば文化創造へ の人間の挑戦の過程は、そういう連続であったと思 う。「青年よ、大志を抱け」とクラークはいった。 今どきそんなことを、と思う人があるかも知れない。 しかし、クラークの思念は時代をこえ、民族をこえ て真実なのである。そう、毛沢東もいっていたでは ないか。

世界は,

君たちのものでもあり、

私たちのものでもある。

しかし,

結局は君たちのものである。

つまり,青年のもの,青春のものだというのである。 新しき友,新入生諸君。

学問することは、くりかえしていうが、真理と正義のしもべになることであり、人間を高め、人間性を豊かにすることである。とすれば、それを歪め、それをさまたげようとするすべての邪悪なるものと 闘え!

大学は, そういう闘いの場である。「 言葉の海 」 への船出の場である。

(アジア研究 助教授)

・学問ノススメ その5

文 化 人 類 学

清水昭俊

文化人類学の基本的なテーマの一つは、「未開と 文明」の対比をめぐるものと思われる。このような 言い方は、純然たる未開民族――「文明」の影響を 全く被っていない、「文明」外的な民族――が皆無 に近い今日では、いささか時代錯誤の感がなきにし もあらずであるが、それでもなお、「未開」と直接 結びついた問題が、人類学者にとって重要な研究課題となっていることからも、妥当と考えてよいであ ろう。例えば、人類学関係の専門誌をのぞいてみれ ば、呪術、タブー、汚れ、トーテミズム、神話、世 界観といった、古典的なテーマが今なお盛んに論じ られていることが分かろう。

さて、「未開」と聞いて、多くの人は何を今さらと思うことであろう。産業の近代化が叫ばれたのは既に過去のことであって、工業化社会から脱工業化社会、あるいは情報社会へと、社会の標識が目まぐるしく変る時代にあっては、石器時代にも比定しうる人々の文化は確かに縁遠い存在であろう。ところが、「未開」に視線を集めつつ研究している私にとっては、現代人にとってのこの「未開」の「縁遠さ」が曲者であるように思える。何故の「縁遠さ」か。ここでいくつかの仮想的な実験をしてみよう。

仮に現代の市井の生活者——文学者でも古代史研究家でもない, ごく当り前の町の人——がタイムト

ンネルでも通って、平安貴族の生活をする立場に置かれたとしよう。今日の日本人にとっては、古代日本語は外国語のようなものであろうが、言葉は自由に通ずるものと仮定して、彼は詩歌管弦の「みやび」を楽しむことができるであろうか。多分、私の想像では、貴族文化を華やかなものと感ずる以前に、彼は身近に接する人々の汚さ(垢、汚れ、異臭)と異様な外貌(歯欠けや身体の病変)、ウジ、蝿、蚊、ダニ、シラミの類い、住居の寒さ、暗さ、悪臭、不便、食物の粗末さ、単調さ、不衛生、人々の迷信や不可解な習俗等々、総じて単調でかつ不気味な生活に困憊し、あるいは萎縮して、音を上げるのではないかと思う。

条件を少し緩めてみよう。現代日本の普通の生活者は、江戸時代町人の生活を共有できるであろうか。多分、結果は平安貴族の場合と大同小異で、やはり町人の生活の基調を感じとるまで耐えることはできまい。さらに下って、電気の入る前の農山村の中クラスの生活は如何であろうか。仕事の厳しさは措くとしても、白飯や(干物や塩魚ではない)生魚を年に数度しか食せない食生活、木綿が上等に属す衣類、板の床にゴザを敷いたイロリの居間と万年床の寝室の住生活は、やはり耐えがたいであろう。

さらに下って現代の、例えば東南アジア都市の生活。これについては何も実験するには及ばない。近年では仕事のために海外生活を送る人は珍しくないので、体験談を聞かされたことのある人も少くないであろう。そのような場合、残念なことに、帰国者の話題の多くも、また海外、ことはアジアなどへの赴任者の周囲の者の心配も、まづは物的生活条件であろう。次いで話題となるのは、土地の人々に対する否定的評価――怠惰、ルーズ、ずるい、不可解云々――ではなかろうか。仕事で海外に赴く人々に、その土地の生活になじみ、人々と親しみ、文化的達成を学ぶといった余裕は、中々期待できない。

ここにあげた四つの例は、いずれも「未開」の問題ではない。仮に「未開」と「文明」とが一つの尺度上に対置されるとすれば、いずれの例も、「未開」にははるかに遠い「文明」の事例ばかりである。それに対して現代のわれわれ日本人は、距離を隔てて、あるいは過去の事象として見る場合には、文化の全体像を見出し、中心的価値を抽出することができる。が、このような冷静な観察を成しうるわれわれも、共時的存在として、かつ生活を共有する者として接する場合には、狭隘な許容力しか持ちあわせていな

いわけである。それは裏返していえば、現代日本人の生活に関する(あるいは、いま少し気取っていえば、生に関する)基本的要件が非常に限定されていることでもある。それは僅か一、二世代前の状態をも不適格とするほどに厳しい。これは、日本人の長い歴史的体験に照らしてみても、やはり異様な状態としか言い様があるまい。例えば、江戸の町人にとっては千年を隔てた平安貴族の生活の方が、百数十年隔てた現代の生活よりもはるかに共感を持てるだろうからである。

関係というものは常に相互的であるから、現代の 日本人がかくも執着し、価値あるものとしている生活も、丁度現代人がそれに照らして他の生活を否定 形で捉えたように、他地域の、あるいは過去の時代 の視点から見れば、やはり否定的評価を免れること はできない。それを「未開」の立場から行えるのが 人類学である。

仮に未開人――といってもその中味は千差万別で あるが、今は類型的に考えるとして――が現代人と 生活を共有するとしたら,彼は物質「文明」の達成 に驚く一方で,現代日本人があまりに幻想の中に価 値を置いていることにも,劣らず驚くことであろう。 現代人は子供の頃からテレビを通して、あるいは活 字や学校教育を通して,膨大な量の事実を見かつ知 るが、その大部分は身近に体験することがない。そ れゆえに, 思春期の若者にとっては, 生活のあらゆ る場面で、情報や映像の世界の美しさと現実との距 離に苦しめられることになる。 学校では, 社会に出 て実際に役に立つことのあまりない内容の教育で大 量の「落ちてばれ」を生み出す一方で,人々は生(生活)に関する最も基本的な知識と技術を身につけ ずに成人する。生死や老い,病,あるいは喜怒哀楽, 恐怖等の,基本的な人間的事象の体験や知識がこれ はど稀薄な社会は,「未開」の中では皆無である。 例えば, 若い妻が未だ間近に見たことも抱いたこと もない赤児を産み、年長体験者の手引きによってで はなく, 書物を手引きに子を育てるといった事態は, 「未開」の生活では信じがたいことである。

現代人は論理的に考えやすい、情報媒体にのりやすい事象に価値を置いて、そこに思考と実践を集中する一方で、生のどろどろした体験にはさして価値を見出していないということであろう。例えば体力。各種スポーツで純粋な能力は鍛えていても、自然の中では役に立たない。トラックやプールでは速く走り、泳ぐことができても、山野や荒海、急流に立ち

向うことは稀である。あるいは生活空間。巨大な都 市に住むことに執着しながら,実際にはその中の僅 かな点と線でしか生きていないことには無頓着であ る。人間関係の面でも同じ矛盾を生きている。巨大 な社会の中に生きながら, 現実に関係している知人 友人・家族はほんのひと握りの人々である。この 点では未開人の方がはるかに広範囲で、しかも内容 の濃い社会関係を生き、かつ楽しんでいる。現代人 はむしろ人間関係を避けて、諸々の物的装置の充満 した狭い空間の中での独居を好むようである。現代 人が「未開」の心性を幼児のそれになぞらえるよう に,未開人は現代人の生活を,水槽の中の熱帯魚一 それはしばしば現代人の独居空間を飾る要素となっ ている ― になぞらえることであろう。自分達の自 然空間に棲む動物は絶滅に追い込みながら、遠方か ら熱帯魚を運んで来て飼い,楽しむという現代人の そもそもの習性が、未開人には理解しがたいものと 映ろう。日本では熱帯の魚は独力で生きることがで きないから、特別の装置を用意せねばならない。と れまた未開人には不可解な特殊化である。熱帯魚は 透明なガラスを介して世界と相対している。同様に, 現代人は分明な情報媒体と知的営みの体制とによっ

て、世界についての知識を我が物としているが、熱 帯魚同様、厚いガラスの壁の外に出ることを拒んで いる。しかもその、壁に囲まれた空間内の生は、電 気を切るというたったそれだけのことで、途絶えて しまう。未開人にはとうてい理解しがたい脆弱さで ある。

* * * * *

文化人類学は現代を直接の対象とする研究分野ではないから、現代についてのまとまった像を提供することはできない。人類学の題材の大部分は、現代の生活とは縁遠い、「未開」の風俗習慣、制度、観念等々である。それはしばしば、現代の生活とは何の接点もないようにすら思えるほど異質なものであるが――それゆえそれを学ぶには時にはかなりの忍耐と想像力を必要とするのであるが――、それだけにかえって、人間の営みの多様性と可能性を知ることができる。さらにその先は、「未開」を介して現代を見るという行程であり、それは多くの人類学者の密かな目標なのであるが、この点ではあまり華々しい成果を収めているとはいえない。が、それでも、人類学を学ぶことによって、現代を見る目を一つ加えることはできるであろう。

(社会文化研究 助教授)

学問ノススメ その6

随想

小 野 寛 晰

数学基礎論に興味を持ち始めたのはいつの頃からだったろうか。印象に残っているのは、高校生の時に初めて非ユークリッド幾何のことを本で知った時のことだ。それまでは、数学の真理は絶対的なものだと素朴に信じていたぼくにとって、数学の真理とは自然界とは独立したものであり、自然界はなんらその正しさを保証してくれないもの(と考えるべき)だ、という考え方に出会ったのは確かに一つの事件だった。おそらくそんな事がきっかけで数学そのものよりも、数学やもっと一般に論理的な思考といったものがどのように確証されるのかという問題の方に興味をそそられるようになったのかもしれない。もっとも、ぼくが本格的に数学基礎論の勉強を始めたのはそれからずっとあとの話だけれども。

そう言えば、いつだったか歴史学者のTさんと話す機会があった。話が数理論理学の先駆者でありまた歴史学者でもあったB.ラッセルに及んだ時に、歴史学における理論というのはいったい何によって正当化されるのか、という質問をしてみた。Tさんの答は、その理論が一貫性を持っていることと、それによってどれだけのことが説明できるかということでしょうね、つまり我々歴史学者の理論というのはせいぜい事実に対して無矛盾であるということしか言えないんじゃないでしょうか、ということだった。このひどく数学的な返事に驚ろかされると共に、Tさんが自分の仕事に対していだいている明瞭な自覚というものを垣間見たような気がした。

数学的なセンスという言葉をよく耳にする。何と

なくわかったようでいてよくわからない言葉だ。とかく人は、数学がよく「できる」という言葉で、数学的なセンスをはかりたがるようだが、はたしてそんなものだろうか。たとえば、筋道をたてて論理的に話を進めるというのも数学的なセンスの一つだろうが、それなら数学の研究者が皆そうかというと、どうもそうでもないようだ。つまり、数学的センスという場合の「数学的」という形容にはもっと広い意味合いを持たせておいたほうがよさそうだ。

ところで数学的なセンスというのがあるなら物理 的なセンスというのもあるのだろう。ぼくの大学時 代の友達に日という男がいた。日は数学が得意だっ たが、実験ときたらからきし駄目だった。というの も彼はとんでもなく不器用な男で, たとえば喫茶店 でコーヒーを飲む時にミルクのカップをコーヒーの 中に落してしまったようなこともある。Hについて てんな話を思い出す。

ある時何人かでプラパズルと いうので遊んでいた。計算機を使うと何千通りの答 がでるというのに, めったに出来たためしのないあ の遊びだ。その時日がやってきて型通りに断片を並 べ始めた。しばらく試行錯誤を繰り返した後に,何 を思ったか急に断片をすべてケースの中に入れ, そ してそのケース全体を揺り始めたのだ。あっけにと られるばく達を尻目に本人はすました顔で、そのう ち答がでるさ、と言ったのだった。もちろん本人だ ってそんな事で答がでるとは思ってもいなかったろ うが, そんな所に日の独特な感覚が感じられた。そ の後, 危ないからやめろ, という友達の言葉もきか ずHは実験物理の方に進んでいった。

数学基礎論や数理論理学における形式的な考え方が計算機科学と密接な関連を持っているということで数年前から計算機の理論にも首をつっ込んでいる。もちろん、この二つはライブニッツの頭の中では同じものだったのかもしれないが、いろいろな場面で二つの考えの相違に気づく。計算の理論というのは電子計算機誕生の20年も前に数学基礎論の一分野として出発し、およそ(理屈の上で)計算できる関数というのはどんなものか、そして原理的に計算することのできない問題、つまり解くための具体的なアルゴリズムが存在しない問題はどんなものかといったことがそこで調べられている。理屈の上でも計算できないような関数を計算するプログラムはもちろん作ることはできない。そこまではよいのだが、計算機を実際に使っている人に言わせると、入力の長

さ(データの長さ)をれとした時たとえば2ⁿのオーダーのステップ数を計算に必要とするような関数は現実には計算できないに等しいというのだ。それどころかれとかれlogれならよいがれ4とかれ5のオーダーになると全く役に立たないらしい。そんなわけで、ただアルゴリズムがあるというだけでなく、アルゴリズムの良し悪しやアルゴリズムの複雑さを測る一つの物差しとして計算量という概念が導入されるようになってきた。

ところがこの計算量の話にも落し穴があるのだ。 ある問題についてこれまで標準的とされてきたアル ゴリズムをある人が改良して新しいアルゴリズムを 提案し,実際に計算量が下がることの証明をつけて 論文にした。そのあとで彼は計算機を使って実際例 についていくつかの実験をしたのだが、その結果を 見て驚ろいた。というのは、彼のアルゴリズムが従 来のアルゴリズムよりも劣るばかりか、標準的とさ れていた従来のアルゴリズムさえももっと初等的な 方法に基くアルゴリズムよりも劣っていたというの だから面白い。一体どこでこんなことが起ってしま ったのか。種明しすればこういうことだ。計算量の 理論では大抵の場合オーダーだけが問題にされる。 だから定数項は無視されてしまう。ところが定数項 が無視できるのは、 れが「十分に大きい」時に限ら れる。ところが今の話の場合,実際問題に現われる れはそんなに大きくなかったというわけだ。

こういう問題で数学の道具が威力を発揮するのは 対象の数が十分多い時だったり, 十分少ない時に限 られていることがあるということは注意しておく必 要がありそうだ。つまり数が多い時には解析的な手 法が、また少ない場合にはたとえば組合せ論的な方 法が有効に使われる。もちろん, この二つの間に統 計的な方法を並べることもできよう。しかしそれと て,やはりある意味で十分に多い対象の数というも のを想定している。またこのことと,力学で粒子の 運動を論ずる場合に数個の物体間の相互作用という レベルと完全流体のように粒子の集まりを一様な物 質であるかのように取り扱うレベルがあるというこ とと対比してみるのもよいかもしれない。そしてこ のような反省をおし進めて,人間が無限とか連続と かいった概念にどのようにして到達し、また何故と ういう概念を必要としたのかを想像してみるのもよ いだろう。逆にての「中くらいの有限」というもの をどのように取り扱ったらよいかを考えてみる必要 もあろう。ただこの場合どう取り扱うかを議論する